

「シエルマ紀行」

松 田 凡

はじめに

「アフリカにおいて、自然との接触は直接であるほどよく、荷物は軽いほどがよい。素直に目で見、心で感じ、そしてあの広大な大地を何よりも信頼のおける自分の足という輸送機関で、肩で風を切って歩くことができないのなら、わたしはアフリカに行くことをとづくに止めていただろう。」

これは2001年に亡くなった人類学者、伊谷純一郎が書いた文章の一節である。初出は1971年、わたしはそれを、1984年に出た講談社学術文庫版『アフリカ紀行』に収められている、「ルグフ川遡行」というエッセイのなかで読んだ。それ以来、わたしはこうした旅をアフリカでしているか、という問いを自分自身に発しつつづけてきた。けれども残念なことに、答えはいつでもノーだった。

1980年に初めて東アフリカのケニアを旅行し、1986年からは主として文部科学省の科学研究費によってエチオピアで文化人類学の調査を続けており、今ではアフリカを訪れた回数を正確に数えたこともない。おそらく十数回になるとおもうが、昨年（2003年）の夏、ようやく長年の想いを実行にうつすことができた。本稿はその旅の記録を、やはり伊谷の『アフリカ紀行』に所収されている「ウガラ紀行」という文章にあやかって、「シエルマ紀行」と題して書いたものである。もとより、希代の名文家であり、霊長類学や人類学（自然、文化

を含む）の分野で偉大な研究者であった伊谷の仕事と、わたしの稚拙な試みを比べようなどというつもりはない。ただ、いつか伊谷のような旅をし、文章を書いてみたいとおもった、その想いのスタートとして引用したのである。

今日まで、オモ川下流平原のほぼ中央部に暮らすムグジと呼ばれる人びとに魅せられて18年、わたしは彼らの小さな村に通い続けてきた。サバンナの真ん中の、外界から忘れ去られたようなもの静かな村の暮らしは、わたしにはとても新鮮で、通算すれば4年にはなる滞在はいつでも驚きに満ちていた。行くとたびに、ささやかではあるものの新しい発見があり、それを文化人類学の論文にすることは、この村の人たちとずっと親しく付き合えるようになるための、私的な努力の一部でもあった。実際、この間に激しい民族紛争も生じ、東西冷戦構造の崩壊に伴うエチオピア国家の変化もあった。その余波を受けて、1990年代にはムグジの人びとが大量の自動小銃を手にするようになった。わたしは懸命に、彼らと共に彼らの上に降りかかってくる現象を受け止めようとしていた。

わたしの研究者としての仕事は、いわば虫の眼をもって彼らの生活基盤である経済活動や人間関係を観察することで成り立ってきたのだったが、それは今おもうと彼らの「現在」を理解することに終始していたともいえる。しかし数年前から、鳥の眼で彼らの生活領域を見渡して見たいと思うようになった。それはただ単に、人びとの地

理的な居住分布を確かめたいという考えにとどまらず、ムグジの民族集団としての形成史、さらには広くエチオピア西南部一帯の民族移動の歴史を知りたいという関心に根ざしている。また、できることなら、彼らがすすもうとしている道の先をも見通したいという、かなえがたい願いもこめられている。上空から一目見るだけならば飛行機をチャーターすればよいが、手塚治虫の「火の鳥」の旅のように時間をも越えようというのだから、やはり人に会って、話しをして、その記憶と現実に触れるほか方法はない。それには、「広大な大地を何よりも信頼のおける自分の足という輸送機関で」歩く旅が最良だとおもわれた。

オモ川下流平原とコエグ

まず簡単に、わたしの調査地であるオモ川下流平原とムグジ（自称コエグ）の人たちについて、さらに、今回の旅の目的地であるシェルマ川との関連について説明しておこう。

オモ川はエチオピア中央高原にその源を発し、北ケニアのトゥルカナ湖に注ぐ全長約1000kmの内陸河川である（地図参照）。上流の半分はギベ川と呼ばれ、樹木の少ない高原を削るように、深い谷を作りながら流れているが、下流の約300kmは一転してサバンナのなかをゆっくりと蛇行しながら流れている。その下流一帯をオモ川下流平原と呼んでおり、19世紀末にドナルドソン・スミスらの探検隊がはじめてヨーロッパにその存在を紹介した。20世紀の初頭にはレオ・フロベニウスの調査隊がこの地に入り、広範な人類学的記録を残している。

1970年前後から、日本を含めた欧米の人類学者によってこの地域の本格的な調査、研究が始まったが、1986年からは福井勝義（当時国立民族学博物館、現京都大学）を中心にエチオピア西南部一帯の調査隊が組織され、わたしもその一員として参加でき

ることになった。

ムグジはこの平原のほぼ中央部、オモ川が大きく複雑に蛇行するあたりに住む人口約500人の小さい集団で、おもにモロコシ栽培と漁撈、ハチミツ採取を生業とする。この地域の住民の多くが、牧畜に価値をおく生活を営んでいるのと比較して、森や川に深くかかわりつつ暮らすムグジは、周辺から賤視のまなざしを受けている。

ムグジという名は、彼らの一部が東の山中にあるムグニャという峠を越えてきたことに由来するようである。自分たちのことはコエグといい、話す言語もスルマ系のコエグ語だが、コエグあるいはクウェグと自称する人たちはムグジだけでなく、オモ川沿いに合計1200人程度、少なくとも3つの集団がいることが知られている。これら以外にも、平原の北端に位置するシェルマ川沿いにも住んでいるらしいという話を現地の人に聞いたのは1994年のことだった。それを確認したいというのが今回の旅のおもな目的である。

シェルマ川はこのオモ川に流れ込む支流のひとつで、ちょうどオモ川が東の谷間から平原に現れて南に90度方向を変えるあたりで、北から流れてきたシェルマ川が合流する。シェルマ川はコーヒーの語源になったといわれるカファの森にその源を発する。地図で見る限りではさほど大きな川ではない。川辺林が発達しているようすもなく、オモ川との合流点をのぞけば、山間をくねるように流れていて平原はない。

エチオピア西南部の一角に住む人びとを大きく分類すれば、標高1500m以上の山地帯にはカファなどアフロ・アジア語族のオモ系言語を話す農耕民が住み、それ以下の低地帯にはティシャナやコエグなどナイル・サハラ語族の東スーダン系言語を話す農牧民あるいは牧畜民が住むということができる。しかしそれは、「棲み分け」といった生態学的概念で説明できるような静的な世界ではなく、自然と人間の歴史とが複雑

に絡み合ったダイナミックなプロセスの一局面である。自然と人間の営みが幾重にも交錯しながら練り上げてきた姿の一瞬を、わたしたちは今日、眼にしているにすぎない。より具体的にいうならば、気候変動とそれに伴う環境変化、それに引き続いて起こる人間生活の変化、移動、衝突と紛争、集団の再編成、そこには近代国家の成立や植民地勢力、さらに資本主義の浸透も大きく影響を及ぼしてきた。それらの要素はとくに過去200年ほどのあいだに、この地域に生きる人びとを激しく揺さぶったと想像できる。それらをひとつずつ確認する作業は、フィールドワークを中心的手法とする民族誌研究者にこそできる仕事だと思う。

チリからマルガワへ、そしてチリに戻る

シェルマ川へのアプローチは2つあって、ひとつは南のオモ川下流平原からボディを抜けてオモ川との合流点からさかのぼるルート、もう一つは北のカファから入り、シェルマ川を下ってくるルート。今回は後者をとることにした。その理由は、上流から入ることによってコエグの北限を確認しておきたいこと。さらには今回、京都大学院生の村橋勲がカファに隣接するオモ系のチャラの調査を開始し、シェルマ川への道案内を期待できるし、また長年やはりスルマ系のマジャンを調査する九州大学の佐藤廉也もカファの森を歩いてみたいというので、わたしを含めた3人で行動を共にすることになった。

2003年8月19日、いつものようにアジスアベバ大学のランドクルーザーで南部諸州カファ・ゾーンの首都ボンガを目指す。翌日、文化省のオフィスで調査許可の手紙を手渡し、さらにデッチャ・ワラダ（郡）の役所があるチリの町まで大学の車で行くことにした。ここはカファの人たちの町だが、元来は深い森だったところを切り拓いて作ったとのことで、電気が来るようになった

のがこの年の2月、標高2000mの山上にある人口数千の田舎町だ。雨季ということである程度は覚悟していたが、すさまじいばかりの雷雨があり、町全体がぬかるんで歩くことすらままならない。今回の旅の手段は馬と徒歩に限られるため、この雨は気がかりだ。高地ということもあって、身体が濡れるとかなり寒い。

8月21日、チリからまず西南方向に向かって最短ならば2日でシェルマ川に達する道を選んだ。近くの村クティまでクリニックの車に乗せてもらい、そこで馬2頭、ラバ1頭を仕立てて3人分の荷物を運び、人間は歩くことにする。初めて歩くアフリカの本格的な熱帯雨林のなかは何もかもが珍しい。樹冠20mはあるかという高木に、たくさん寄生植物やツル植物が絡まり、根元は大きな葉のシダ植物で埋め尽くされている。しかし、確認できた動物はブルーモンキーのみ、1時間も歩けば森の中心部分は通り抜けてしまい、後はカファの拓いた畑の横を通るだけだ。さすがに王国を築いた人たちだけあって、カファは開拓者だと感心する。一方、道はぬかるんで数え切れないほど転び、断続的に降る雨で全身ずぶ濡れだが、気分は高揚して明るい。今度の旅は楽しめますねえ、という佐藤のことばが、少しも皮肉ではなく、体の中から共感できる。

出発からおおよそ7時間、夕方4時前にマルガワという村に到着した。村のリカマンバル（村長）に相談して、丘の上にあるトタン屋根の会議場の中にテントを張らせてもらうことになり、シューメルという名前の35歳くらいのヒゲ面の男を守衛としてつけてくれた。カーキ色の薄汚れたつなぎに、薄緑色の長靴をはいたひょうきんな男だ。すぐにでもシェルマ川への道を急ぎたいのを我慢して、ひとまずここで情報収集することにしたところ、興味深い事実を耳にすることができた。

村人によると、このマルガワという村は

社会主義政権下の1985年（エチオピア暦1977年）、国家による集団移住計画（リセツルメント）によってできたという。当時、食糧不足に苦しむエチオピアでは、人口の過剰地帯の住民を希薄地帯へと強制的に移住させる計画がすすめられていた。西南部は比較的人口密度が低く、開墾可能な土地も多く残っていたので、移住対象地に選ばれることが多かった。したがって、マルガワの住人の多くはエチオピア北部のアムハラ州から来た人びとで、この地域のもとの住人であるメニットと呼ばれる人びと（民族誌的にはティシャナあるいはメエンといい、コエグと同じスルマ系言語を話す農牧民）は周辺部に追いやられている。

われわれのキャンプを訪ねてくれた35歳の男性は北部のラリベラ出身のアムハラで、移住後、ウォロ州出身のアムハラ女性と結婚した。ここの暮らしは今では悪くはないが、移住当初は畑もなく、食糧不足と病気、とくにマラリアで死ぬ人が多く、1965人が死んだと何度も繰り返している。

この時期、村はちょうどトウモロコシの収穫が済んだところで、どこへいってもご馳走してもらえた。また、30cmほどの丈に伸びたカーリヤ（トウガラシ）の植え付けが始まったばかりで、ウシに引かせた鋤で畑を耕す村人の姿をあちこちで見かけた。1kgを2、3ブル（30－40円）で商人が買い付け、アジスアベバではそれが数十ブルになるという。ここまで暮らしを安定させるには、われわれには想像のつかない苦しさだったことだろう。アムハラ農民というのもまたたくましい。

村を歩いていると、ある1軒の家からご詠歌のような声が聞こえてきた。どうやらアムハラ特有の憑霊信仰であるザールが行われているらしい。のぞいてみたいといったが、結局となりのコーヒーパーティーのほうに引っ張り込まれてしまった。

だが一方、カファがいうシェルマ、マルガワの人たちがいうシェルミに関する情報

は、残念ながら芳しいものではなかった。アムハラの人たちは口々に、川沿いには人はいないといい、雨季にはそこにたどり着く道はないという。守衛兼ガイド役のシューメルは、乾季なら途中で温泉はあるし、川で魚をとってたらふく食べられるのに、という。しかし、彼らがこの地域の事情に詳しいかは疑問が残るので、アムハラ語のわかるメニットの男を紹介してもらい、グーラワという彼の村まで行ってみたが、やはり答えは同じだった。

そうになると、これ以上マルガワに滞在する意味はない。おもしろそうな村ではあるが、佐藤、村橋と協議の上、チリまで戻り、今度はまっすぐ南のアンガラ方面に向けてすすんでから、再度道を西方向、すなわち川沿いへととることになった。8月23日、約6時間歩いて、再びチリのゲンネ・クレ・ホテルに戻った。

チリからジョンガジャへ

8月24日、チリ郊外で馬2頭、ラバ3頭を1頭につき60ブル（900円弱）で雇い、今度はラバに乗って出発、5時間ほどでディシという村についた。前半は天気もよくトレッキング気分だったが、後半は雨にあい、ラバが滑って上れない坂は人間が歩かなければならなかった。しかし、マルガワへの道とは違い、人の往来も多く、途中の酒場でハチミツ酒のタッジを飲んだりしながらの旅だった。ディシは標高2200m、クリニクの軒先にテントを張らせてもらったが、体が冷え切っていることもあって、夜は凍えるほど寒い。全身泥だらけだが、水を浴びる気にはなれない。

8月25日午前10時30分、ディシをラバで出発、アンガラを経てゴダという村に12時ごろ到着、ここでアダトというメニット語のわかる人物を探し出し、通訳兼ガイドとして連れて行くことにした。次第に高度を下げながらカファの村々を抜け、やがて山

地性のサバンナが広がるメニットの領域へとはいっていく。ラバにも慣れ、馬子とあれこれ会話しながらの旅は楽しい。ガバボという名のカファの青年（25歳くらいだろうか）は、数ヶ月前にアレクサンダーという名のオランダ人と共にこの道を通って、オモとシェルマの合流点付近まで行き、さらにオモ川をわたって、ボディの領域内にあるハナの町まで行ったという。そこまでたどり着いて、役所の車に同乗させてもらえば、南オモ・ゾーンの首都であり、わたしが慣れ親しんだジンカの町まで4時間ほどである。時間さえあればそのルートを踏破してみたいが、今回は無理そうだ。しかし、同じようなことを考えて行動する人があるものだと感心した。

シャシベラというカファ、チャラ混住の村でラバをおり、徒歩で出発、山の斜面を横切りながら、17時50分にウプタというメニットの村に到着した。草丈が30cmほどに伸びたテフ畑にしゃがんでいた男が立ち上がったのを見て、一瞬ドキッとした。なぜならそのたくましい体躯、精悍な顔つき、腰につけた赤と青の格子模様の布は、オモ川下流平原で見るボディやムルシの姿そのままだったからである。

ボディやムルシとメニットは同じスルマ系のティシャナあるいはメエンと呼ばれるグループに属し、言語もかなり近いからおどろくにはあたらないのだが、ボディやムルシが低地に暮らしウシ牧畜に特化しているのに対し、ここのメニットは標高1500mの山地で農耕中心の暮らしを送っている。

近年、低地のメエン系集団は次第に農耕に適した高地へと移住しつつあるという報告があり、このシェルマ川東岸の人たちもこの地に移り住んで間もないはずだ。西岸のバチュマ地方ではすでに古くからメエン系の人たちが住んでおり、ほぼ完全に農耕民化しているという。このティシャナ（メエン）系の人たちの生活様式のヴァリエーションを追いかけるのもおもしろそうな仕

事だ。何よりもことばが広範囲に通じるのはフィールドワーカーにとって一種の快感だろう。

ウプタのガオ・ギタンガという男の家は標高およそ1800mの山の斜面にあって、テントを張るのに平らな場所がなく苦労したが、そこから見える山の尾根が幾重にも重なった眺めはすばらしかった。バチュマ方面の山が南西方向に見え、シェルマ川はその手前を流れていることになる。地図で見ると直線距離ならばここから川までは近い。

しかしアダトにたずねると、シェルミ（彼はこう発音する）へはまだまだだという。ここからさらに南へ3日ほど歩いてからオモ川沿いに西へ向かい、合流点に達するというから、途中で西の川沿いへまっすぐ出るルートはないということらしい。8月30日にチリへ戻って大学のドライバーと合流する約束をしているので、そこから逆算すると、アダトの言うルートではシェルマに到達することはできない。断念ということばが頭をよぎるようになったのはこの日からだ。

8月26日午前9時30分、アダトラ5人のポーターと共にウプタを出発。ボタブルという集落のシマジという男の家で腹いっぱいのおもろコシをご馳走になり、元気よく坂を下る。ガバボやメラクラカファのポーターは15kgほどの中型ザックでも背中に背負うよりは頭に載せて運ぶほうがいらしく、ターバンのように布を巻いた頭の上に、器用にバランスをとりながら荷物を運ぶ。まったく頼もしい限りだ。われわれ3人とは体力面でも比較にならないが、こちらは今回ようやく本格的に使い始めたGPSによる位置確認、写真撮影、メモのために何度も立ち止まるので、どうしても遅れてしまう。途中、パシ峠から初めてかなたに光るシェルマ川を目にし、しばし感激に浸る。

1000mまで下りたあたりから山地疎林帯のなかを、また高さ3mあまりのイネ科の

草を掻き分けながらすすんだ。15時40分、標高886mのジョンガジャというメニットの村に到着。南に開いた小さな谷の中ほどにあって、草屋根の家が6軒見える。ゲレサという40歳代くらいの男がこのコンパウンドの主らしい。ウプタからずっとついてきていた9歳くらいの少年はその名をケロといい、ゲレサの息子だという。ここにキャンプを張らせてもらい、じっくり作戦を練ることにした。

ゲレサはアムハラ語を解しないので、アダトを通訳にシェルマ川の情報を聞き出すが、予想通り、ここから西へ下ってシェルマ川へ至る道はないという。地図上の直線距離だとわずか2.5kmしかない。草をラッセルしてでも行けないかと訊くが、だめだという。この時点で、今回の旅の目的は断念せざるを得ないことがはっきりした。少なからずショックだった。

ジョンガジャ滞在の後、チリに戻る

これ以上の前進は意味がないと判断し、しばらくこの村に身を寄せてゲレサからいろんな情報を得ておくことに決めた。次回の探査行に備えてできる限りこの地域のことを知っておきたい。ゲレサは「バチャ」は知らないが「イディニット」は知っており、それはオモの人びとだという。アダトはシェルム川（メニットはこう発音する）にもイディニットはいるといい、魚を捕って暮らしているという。そこへいくには、ジョンガジャからガラムジまでが5時間、ガラムジからボショまで1日、さらにダバシントまで1日、そこからゴラインカブルまで3日、そしてさらに9時間でシェルム川に達するというのがゲレサの情報だ。

地図を見るとそれほど時間がかかるとは思えないので、アダトがこれ以上旅を続けたくないために、大げさに答えている可能性はあり、この計算は割り引いて考える必要がある。とにかくはっきりしたのは、

オモ川とシェルマ川の合流地点へ行くには、北側のカファから入るルートより、南側のボディ領域内にあるハナの町からアプローチするほうが容易だということだ。それに、こうした旅は乾季に行なうほうが楽だ。

8月27日、ジョンガジャに思わぬ客が現れた。シェルマ川の対岸にある山地帯、つまりバチュマのチャバラというところから3人のメニットの商人がやってきた。3人とも年齢は20歳より若いくらいだろうか、背は160cmくらいで大きな頭に半ズボン姿ということで、見かけはまったく高地の農耕民に見えるが、もちろんメニット語を話し、アムハラ語も流暢に話すのには驚いた。小学校は卒業したのだろう。商人ということで、アラキ（日本でいう焼酎）の入った20リットル入りのジェリ缶を2本と、小さなガラス製のブルチコ（コップ）を数個もっていた。川沿いに住むメニットに売ろうとして売れなかったのも、ボカブルにいるシマジに明日、売りに行くつもりだという。しかし、ここジョンガジャでアラキは売れそうだ。われわれがゲレサの息子ガラジャから100ブルで白いヤギを買ったので、とりあえずカネはある。

メニットの3人にわれわれの拙いアムハラ語でいろいろと聞いてみる。彼らはバチュマから2日歩いてシェルマ川へ出て、川を渡ってきたという。2本の本を両脇に抱え、足のつかない川を流されながら渡ってきたという話は真実味があった。そこから4時間ほど歩いてジョンガジャに到着したというから、やはり道はあるのだ。1日で行って帰って来られない距離ではない。ここまで来てシェルマの水を浴びることができないのは無念ではある。しかし、彼らはイディニットのことには知らなかった。川の中流域にはコエグは住んでいないようだ。

8月28日、今日もまた早朝は雨。6時ごろからずっと降り続けている。夜半にはヤギが暴れて、それを追う人びとの声が騒々しかった。目覚めてからはニワトリの音が

やかましい。雨のせいでいつここを出発したらよいか決心が鈍る。テントにあたる雨音を聞きながら、日本にいる家族のことを考える。とくに毎年夏休みを一緒に過ごしてやれない子供のことを思うと、心が痛む。思い切って、3mほど向こうのテントにいる佐藤に、今日出発しようと声をかけた。雨に弱気になっているわたしに、彼は優しく同意してくれたばかりか、「今回の旅は楽しかったなあ」とあらためて一言。「またいつか、もう一度、どこかを歩こう」と返事をして、テントの中で帰り支度を始めた。

結局、雨は午後1時ごろまで降り続き、今日は帰るのをほとんどあきらめかけていたが、アダトラはすぐにでも出発しようという。彼らも早くうちに帰りたいのだ。ポーター5人に、村橋を追いかけてきた3人のカファを加え、さらにメニットの女が1人、そしてわれわれ3人の計12人で13時30分出発、小雨がぱらつき、濡れた草で全身がびしょ濡れになったが、みな足取りは軽い。標高860mのジョンガジャから、一気に1800mのパシ山へ直登する道は心臓破りともいえる。雲海に沈む山々に別れを告げ、かすかに峠の上から見下ろすことのできたシェルマ川にも再会を近い、17時10分、ボカブルに到着した。途中、持っていたハチミツをパシ川の水で溶いてのみ、焼いたトウモロコシを袋から出してはかじりながらの道中は苦しいながらもハイキング気分で、ポーターの旅慣れた振る舞いに感心させられた。アジスアベバから運んできた大量のミネラル・ウォーターのボトルも、ほとんど底をつきかけていたので助かった。

8月29日、朝8時過ぎに勇んでボカブルを出発、しかし15分ほど歩いたところにあるメニットの家でトウモロコシを腹いっぱいご馳走になった。アダトラの頭にはペース配分という考えはないようだ。遠くの畑をグリーンモンキーの群れがゆっくりと移動していく。山の頂上まで見事に畑として

耕されているのに驚く。収穫したばかりのテフが干されているかと思うと、30cmほどに伸びたまばゆい若緑色のテフもある。高度によって収穫時期もこれほどずれるのだろうか。山の斜面をなめるように歩きシャシベラの村に入った。ラバが5頭、ここまで何を運んできたのか知らないが、ここからはテフを高地のマーケットにもっていくらしい。

14時30分、アンガラの手前で休憩をとることになった。もうここはメニットではなくカファの住む領域だ。カファ語でドーチョというどぶろくを飲むための休憩である。民家の前に打ち捨てられているように見えたエンセーテ（ニセバナナ）の葉が一種のサインなのか、アダトラが家の女に声をかけて促すと、20分ほどで10人を越える女たちが集まり、エンセーテの葉で直径80cmくらいの桶を作った。そこのドーチョのタネを入れ、水を加えながら1.5リットルほどのヒョウタンにつめる。これが1つ1ブルだ。これは女たちの小遣い稼ぎなのだろう。

カファの習慣として、ひとつのヒョウタンの口から2人の男が頬を合わせるようにして一緒にドーチョ飲む。好天のもと、道沿いの植え込みの木陰に腰かけてみんなでドーチョを飲んでいると、幸せな気分がじわじわとこみ上げてきた。われわれの前を通るのは、屋根を葺くのに用いるカヤを束ねて頭で運ぶ少年、教会からコチョ（エンセーテのパン）と酒を運ぶ3人連れ、空荷のラバを引く馬子たち、皆はにかむようにこちらを見ながら通り過ぎていく。彼らにも仕事帰りにいっぱいという楽しみ方はあるのだろうか。

16時過ぎ、アンガラのアダトラの家に着いた。カファの人間とさんざん付き合ったような気がしたが、実はカファの家に入るのは初めてだった。メニットの家と比べると、同じようにウシが家の中に飼われているのだが、それでも広く（直径6mはある円形）、においも少ないので居心地がよい。

ようやくここまで帰ってきた満足感というのもあろう。今晚はここに寝かせてもらい、明日はチリまでまたラバの旅だ。シェルマにコエグを探すというわたしたちの旅は、事実上ここで終わった。

シェルマ川上流地域とコエグ

結果的には、「シェルマ流域に住むコエグ系集団を調査する」という当初の目的を達することはできなかったが、少なくとも中・上流域にはコエグ系集団は住んでいないということはほぼ確認できた。シェルマ川下流の、とくにオモ川と合流する近辺では、メニットのことばで言う「イディニット」がいるらしいということもわかった。これについては近いうちにここを訪れて確認することにしたい。やはり、8月という雨季に、上流のカファ側からアプローチするというのが無理だったということだが、マルガワというアムハラの移住村を体験できたこと、メニットの生活様式のヴァリエーションを観察できたことは貴重だったとおもう。やはり、歩いてみなければわからないことは多い。

さて、コエグ系集団の分布について、今回の調査を含め、わかっていることをまとめておこう。はじめに述べたように、自分たちをコエグと自称する人びとは、オモ川下流平原におよそ1200人いると推察され、大きく分けると、最も上流部のボディ領域内に住むイディニットと呼ばれる集団が約200人、その下流のムルシ領域内にニディと呼ばれる集団が約400人、そして最下流部にはムグジが500人強住んでいる。オモとシェルマの合流地点にいと推測される集団は、このイディニットの一部として存在するのか、独立した集団なのかはさらに今後の調査を要する。

この3つのコエグ系集団は、互いに相手の存在を知ってはいるようだが日常的な交流はない。川沿いの距離にして200kmに

満たない範囲に住んでいながら、それぞれに独立した集団として存在しているのは不思議に思える。そこには、彼らの集団としてのアイデンティティのあり方がルーズであることが見て取れると同時に、それは集団としての歴史的形成過程が大きくかかわっている。

わたしは最近になってようやく、ムグジの民族形成について統一的なヴィジョンをもつことができるようになった。わたしが聴き取りをした彼らのエスノ・ヒストリーによると、ムグジはオモ川下流平原とその周辺の5つの地域から移り住んだ人たちによって構成されている。さらにそれをこの地域の研究者や文献などから得られる事実とあわせて考えると、その移動の原因は19世紀末にこの地方を襲った家畜の伝染病によるものらしい。したがって、それは今からわずか百数十年前のことになる。移住してきた人びとの多くは牧畜の伝統をもっていた人と思われ、いずれもコエグ語の話者ではない。歴史言語学者のC. エーレットの分析を信じるならば、移住してきた彼らが、もともとオモ川流域の川辺林に住んで狩猟採集の伝統をもっていた人たちと合流して、現在のムグジが構成されたということになる。このもともとオモ川沿いに住んでいた人たちのことを、ここでは仮にプロト・コエグと呼んでおこう。

今日、コエグと自称する集団にまつわる大きな不思議がさらに2つある。ひとつは、これらの人びとがいずれも同じ地域に住む牧畜集団から差別民として扱われているという事実である。イディニットはボディから、ニディはムルシから、そしてムグジはカラから暴力的支配を受け、両者のあいだには通婚忌避や、ひとつの容器から水や酒を飲むことのタブーがある。ボディやムルシ、カラは先住民であるコエグ（クウェグともいう）を征服したという語りをもち、その一方で首長就任儀礼の際にはクウェグが祭司として重要な役目を担っていること

も報告されている。なぜ彼らは差別されるのか。わたしはそれを賤視という概念を使って考えてみたことがある。すなわち、より自然の世界に通じた存在に対する畏れが根底にあると思うのだ。その畏れを打ち消すために相手を貶め、差別するという構図は、ヨーロッパや日本の中世においても見ることができる。

コエグにまつわるもうひとつの不思議は、オモ川下流平原を取り巻く山地帯の農耕民社会のいくつかに、コエグ起源のクランを有するところがあることである。たとえば平原の西に位置するディジにはコイギと呼ばれる被差別クランがあり、オモ川沿いから来たと伝えられていることを出口顕が報告している。また、平原の北、シェルマ川の東に位置するチャラを調査する村橋勲によれば、チャラのなかにコエガツツアというクランがあり、さらにエチオピア西部の森林地帯に住むマジヤン（言語的にはコエグと同じスルマ系）にはコイギールというクランがあることを佐藤廉也から聞いている。

果たしてこれらの事実は何を意味しているのだろうか。これはまったくの推測に過ぎないが、かつてエチオピア西南部一帯にはプロト・コエグというべき集団が広く分布しており、他民族が移住、定着する過程で先住民である彼らを社会のなかに取り込んでいったのではないか。それらが今日、クラン名としてコエグという名称に由来する亜集団となっているのではないか。

だが、このプロト・コエグという集団がさらに時間をさかのぼってどこにつながるのかについては、有力な情報はない。唯一、エーレットは諸集団間の基礎語彙の一致率や借用、語源関係などから判断して、B.C. 3000年ごろにプロト・スルマがプレ・マジヤンとプロト・南スルマに別れ、B.C. 2000年ごろにプロト・南スルマがプロト・南西スルマとプロト・南東スルマに分かれ、そして B.C. 1000年ごろにプロト・南東スル

マがクウェグと核スルマ（メエン、ボディ、ムルシなどを含む）に分かれたという推論を出している。とすると、今から3000年前にはすでにコエグ（クウェグ）はオモ平原にいたということになる。エーレットはさらに、このクウェグに連なる非スルマ系の狩猟民がこの地域にはいて、オモ川下流平原の西に位置するマジ高原の南および南東の辺縁にいたクウェグによって吸収されたとしている。この非スルマ系の狩猟民がだれなのか、エーレットも明らかにしていないが、一般的に考えて、アフリカ大陸の先住民であるコイサン系（カラハリのブッシュマンなど）かピグミー系の人びとであったとするのは、仮説のひとつとしてありえよう。

今日のムグジについては、先ほども述べたように、その民族形成は最近の百数十年ほどのできごとだとおもわれるので、彼らの歴史が3000年の昔にさかのぼるというつもりはない。ただ、絶え間ない民族移動の歴史、いかえれば、いくつもの文化的アイデンティティをもった集団がオモ川下流平原のサバンナを横切り、川をわたり、住みついては消えていったその姿は、深い感慨を抱かせる。彼らこそ、信頼に足る二本の足で、住みやすい場所を求めて転々と移動した人びとであったことだろう。

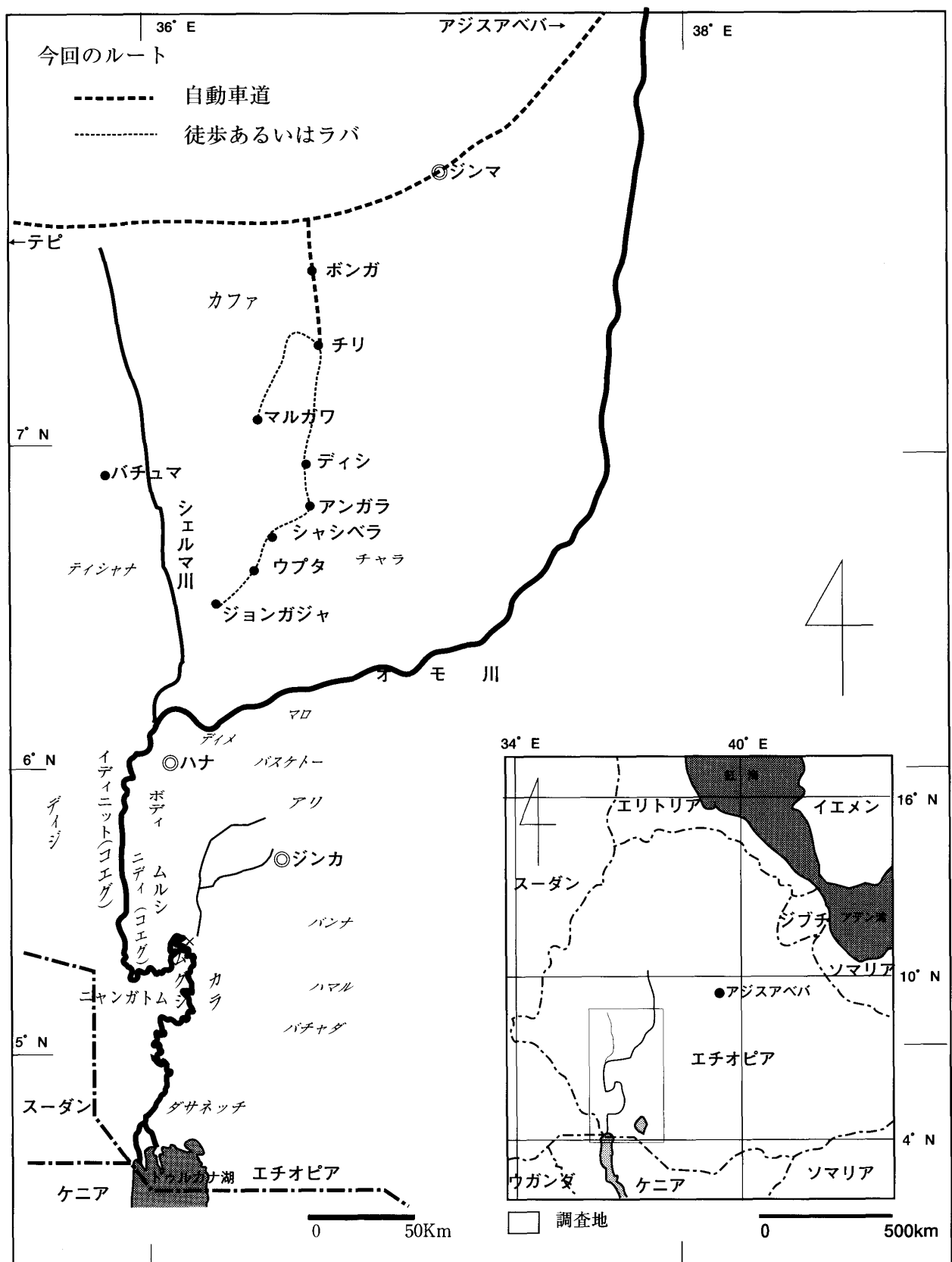


図 オモ川下流平原とシエルマ川流域 (注1. 細字体は民族集団名)



写真1：開拓最前線の村マルガワ。20年前はここも一面森林だったのだろう。テフを刈り取ったばかりの畑が広がっている。



写真3：頼もしいカファのポーターたちと道端でドーチョを飲む。2人でひとつのヒョウタンの口からいっしょに飲むのが彼らの習慣。アルコール分は少なく、たくさん飲んで酔っ払うことはない。何時間も歩き続けてきた後は格別にうまい。

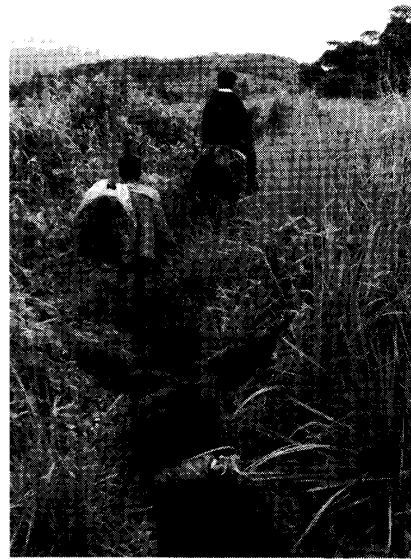


写真2：山地性の草原のなかを行くラバの旅はけっこう楽しい。ラバにも個性があって、扱いやすいのとそうでないのがいる。このときの相棒はまずまずだった。



写真4：トウモロコシ畑に作った鳥見台の上でくつろぐメニットの家族。



写真5：ボカブルの主シマジ。この姿だけ見ると、オモ川下流平原でウシを追うボディによく似ている。彼らがこの地に移住してきてどれくらいになるのか、ゆっくりと訊いてみたかった。



写真6：尾根の斜面にへばりつくように並ぶジョンガジャのゲレサの家。ここからシェルマ川までは直線で約2.5kmと近い。手前はトウモロコシを収穫したばかりの畑で、ここには家畜はいない。ジョンガジャにはわずか2泊しただけだったが、家族の暮らしぶりも見ることができ、居心地は悪くなかった。



写真7：ジョンガジャの主ゲレサの妻の一人。壺づくりは女性の重要な仕事のひとつ。

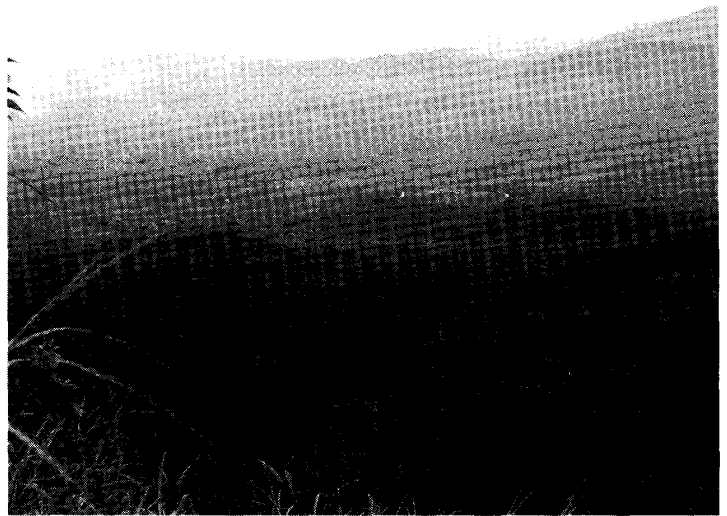


写真8：パシ峠から南西方向のかなたに、わずかにシェルマ川が見える。おもったより小さく、川辺林も発達していないように見える。その向こうの山並みはティシャナの人びとが住むパチュマ方面。

ABSTRACT**A Travel Note to the Sherma****Hiroshi MATSUDA**

This essay is an account of my travel to the lower Sherma valley of southwestern Ethiopia in August, 2003. The purpose of my travel was to confirm the existence of the Koegu community along the River of Sherma, so that we will know the geographical distribution of the Surma language group to which the Koegus belong and the route of historical migration of the people in the southwestern Ethiopia. In conclusion, I did not find the Koegu community along the Sherma, however, I obtained the reliable information that they live near the junction of the Omo and the Sherma where I could not reach in this trip.

On August 19th, Ren'ya SATO (Kyushu University), Isao MURAHASHI (Kyoto University), and I departed from Addis Ababa in a four-wheel drive car of the Addis Ababa University. We arrived in Bonga, the capital town of Kaffa Zone, and 430km apart from A.A. On 20th, we got to Chiri, the capital of Decha Wereda, after 30 minutes drive from Bonga. Cars could not continue past this point so the main form of transportation was horse or mule. We took the shortest route from Chiri to the Sherma, which possibly took us to the destination in two days.

On 21st, we arrived at Marugawa after 7 hours walk from Chiri. Marugawa was one of the villages established by the resettlement plan of the socialist ex-government of Ethiopia in 1985. Some villagers said that most of them were forced to move from the Amhara region of the northern Ethiopia, and that they had had a hard time building a stable life till now. But we could not get information about the people living along the Sherma. According to them, the path to the river from Marugawa disappeared during the August rainy season, and no people stayed near the river. So we decided to go back to Chiri and advance further south to Angala, then aim for the Sherma.

On 24th, we started from Chiri to Dishi on five horses and mules in the rain. It was cold on the ridges at morning and night in particular because of the altitude (more than 2,000m above sea level). We found that the rainy season was not good for such a field trip in this area. On 25th, we went by horse from Dishi to Shashibera in five hours, and then found a guide who knew the route and the language of the lowland area. After two hours walk we got to the place called Upta at an altitude of 1,800m and camped out in one man's compound. This is not the Kaffa but Menit (Me'en) area where the people speak the Surmic language to which the Koegu also belongs. On 26th,

determining the position by GPS, we went down southwestward and arrived at one Menit man's compound called Jongaja after six hours walk.

According to the map (1/50,000 scale made by Ethiopian Mapping Agency), the distance between Jongaja and the Sherma was about 2.5km, but a man living here told us that it was difficult to find the direct path to the riverside in this season. We stayed here for three days and collected much information about the Koegu who were called "Idinit" in Menit. One Kaffa porter told us that he guided a Dutch man through this area and traveled to Hana town in the lower Omo 60km south. On the way to Hana, they had to pass through the places called Garamuji, Boshu, Dabashinto, Gorainkabur, then to the junction of the Omo and the Sherma. The Menit man here and the porter said that they knew the "Idinit" living near the junction. We also talked with three young Menit merchants coming from Bachuma town on the mountain over the Sherma. They said that they crossed the river by holding on to some trees and there were no "Idinit" homesteads at the crossing point.

We could not continue beyond Jongaja because of the schedule this time, so we gave up searching for the Koegu along the Sherma any more. Consequently, we found that no Koegu stayed in the middle and upper Sherma, but that they probably lived in the lowest area near the junction to the Omo. Moreover, I knew that it was better to approach the area from Hana town in the lower Omo area. It is regrettable that I could not see the Koegu; however, the trip was fruitful in that I saw the Amhara re-settlement village and got to know the various modes of life of the Me'en people and some hints concerning their expansion.